失われた花の都 おおさか散歩

関帝廟は大阪にも

三月は桃の節句である。人形店が建ち並ぶ松屋町には、この季節、何段飾りを誇る雛祭りの人形がたくさん陳列されていることだろう。

幕末の錦絵揃い物「浪花百景」を見ると大坂は、艶やかなる花の都であった。《梅やしき》《桜の宮》《野田藤》《うらえ杜若》《吉助牡丹盛り》などの錦絵のなかに、桜、梅、藤、カキツバタ、牡丹などが咲き誇り、むろん桃の花もある。

《野中観音桃華盛り》は現在の近鉄上本町駅付近の桃畑を描き、《産湯味原池》にある味原池（現・天王寺区小橋町）付近は、安政2（1855）年の暁鐘成『浪華の賑ひ』に「弥生の初旬、花の頃は老若男女うち群れて野径に充満す」と記される一面の桃畑である。俳句の春の季語でもある桃は、薄桃色の花をつけ、季節ごとに一年を分割する七十二候にも「桃始笑」があった。

かつての桃畑の面影はないが、今も上町台地のこの付近には、環状線の「桃谷駅」をはじめ桃のつく地名が多い。統合されて閉院したが、歴史ある大阪市立桃山病院や桃山市民病院もあったし、合併で中央小学校になった桃園小学校、桃谷小学校が空堀商店街のそばにあった。

しかし、桃というと雛祭りだけではない。本紙は毎月10日発行なので、皆さんが本紙を手にするころは、雛祭りは終わり、松屋町の人形店も、勇壮な五月人形に変わっている。私などは桃花と聞くと、劉備、関羽、張飛の英雄豪傑が義兄弟となる『三国志演義』の「桃園の誓い」を思い出す。

最近、古書店で天明8（1788）年刊の『画本三国志』を入手した「三国志」好きはなにも現代人だけではない。昔から大阪人は好きだったらしく、序文には大坂の医者で読本作家としても活躍した都賀庭鐘（1718～1794頃）の名が記され、絵を月岡雪鼎の門人で自ら「浪華画工」を称した桂宗信（1735～1790）が描いている。しかしまあ、かなり武骨な「桃園の誓い」だ。

一方、第83回の生玉人形の時にも紹介したが、大坂の本では、大岡春卜（1680～1763）が描いたともされる戯画の画集のタイトルも「鳥羽絵三国志」《享保5（1720）年》である。芸能などを題材に、手足が長く、ひょろひょろデフォルメされた登場人物たちが、なんとも洒落ている。

そして話が飛ぶが「三国志」との関係を探れば、神戸や長崎、横浜で今も信仰を集め、中華街などの観光名所である「関帝廟」が大阪にもあるのをご存じだろうか。義理堅いことから、商売の神様にもなった関羽を祀った御堂である。

『画本三国志』（1788年）の「桃園の誓い」。
左から劉備、関羽、張飛。桂宗信の挿絵が、なにやらゴツい。

『摂津名所図会』によると、一つは安立町亀林寺（住之江区安立3丁目）にあった。寺の開基は中国から日本に亡命した禅僧の東皐心越（1639～1696）で、心越が明国から招来した関羽像が関帝堂にあったという。これは心越を援助した水戸光圀も信仰し、水戸の祇園寺から亀林寺に移されたとする。寺は明治に廃され、残っていた関帝堂は水害で失われた。

もう一箇所は、四天王寺の東門を出てすぐの白駒山清寿院（天王寺区勝山2丁目）にある。『浪華の賑ひ』には「黄檗派の禅刹にして堂舎唐山の風を模せり。蜀関羽の像を祀る。応験いちじるしと云ふ」とある。当初は浄土宗であったが明和元（1764）年に黄檗僧の大成照漢（1709～1784）を中興開山として黄檗宗の寺院となった。大成は中国からの渡来僧で、後に、宇治の黄檗山萬福寺第二十一住職となった。

清寿院には、大坂の文人で博物学者の木村蒹葭堂もよく訪れ、自慢の中国絵画や新傾向の絵を展観する「書画会」が開催された。『画本三国志』を描いた桂宗信の墓が清寿院にあるのも何かの因縁だろう。関帝廟は今も信仰され、同寺のホームページに紹介されている。

それにしても、谷町六丁目付近から小橋町、桃谷から四天王寺や清寿院にかけて桃とゆかりが深い。いまは昔、「三国志」マニアの悪友同士で桃畑の見物に出かけ、よっしゃ、一つ見立てをしようと話が進んで「ワシが劉備や」「関羽でおます」「ぼく張飛」なんて、芝居気たっぷり杯を傾けたんでしょうな。

筆者プロフィール
橋爪 節也 はしづめ せつや
大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村蒹葭堂―なにわ　知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の幻像―』（創元社）など。